

平成十六年度 入学試験問題

国語

一五〇点満点

△配点は、学生募集要項に記載のとおり。▽

(注意)

- 一、問題冊子および解答冊子は係員の指示があるまで開かないこと。
- 二、問題冊子は1ページから10ページまでの10ページ、解答冊子は表紙のほかに12ページ(うち7ページは下書き用)ある。
- 三、問題は全部で3題ある。総合人間学部の(理系)・理・医・薬・農学部志願者は、3題のうちから任意の2題を選択すること。総合人間学部の(理系)・理・医・薬・農学部志願者で3題とも解答した答案は無効になる。
- 四、解答はすべて解答冊子の指定された箇所に記入すること。総合人間学部の(理系)・理・医・薬・農学部志願者は、選択しなかった問題の解答欄に斜線を引き、選択しなかったことを明らかにすること。
- 五、筆答開始後、解答冊子の表紙所定欄に学部名・受験番号・氏名をはっきり記入すること。表紙には、これら以外のことを書いてはならない。
- 六、解答に関係のないことを書いた答案は無効にすることがある。
- 七、解答冊子は、どのページも切り離してはならない。
- 八、問題冊子は持ち帰ってもよいが、解答冊子は持ち帰ってはならない。

次の文は、昭和十一年に作者が、イタリアに留学する息子に送った書簡文からの抜粋である。よく読んで、後の問に答えよ。(五〇点)

若い潑刺はつらつとした感受性と疲れを知らない理解力であらゆることを知り、探求し、学び取ることは、まことにあなた方に課せられた、またそれ故にこそ意義ある愉たのしい征服ではないでしょうか。それとともに忘れてはならないのはあなた方の吸収した専攻学科の知識をただそれだけの孤立したものとししないで、人格的な纏まとまりのある一つの立派な教養にまで押しひろげるように心掛くべきことだと信じます。

それではなになが教養かということについてはいろいろ複雑な規定を必要とするでしょう。しかし最も素朴な考え方をすれば、知識が単に知識として遊離ゆりしないで総合的な調和ある形で人間と生活の中に結びつくことだといつてよいだろうと思ひます。普通(1)それとともに対句のように並べられる趣味と非常に似通っているようで内容的に遠い距離がその間にあるのも、それはただ生活と事物のほどよい味わい方を知ることであり、これはもつと根の深い積極性をもっているためであります。同時にまた趣味のある暮らし方をするということが、有閑的な無駄な消費生活と見做みなされるように、教養も尊敬の代りに軽蔑と反抗で否定されかねない場合があります。遠くはフランス革命のあとに見出された、近くはまたロシア革命の直後にもつとも過激に生じた現象によつて、また一層手近い昭和五、六年を頂点として日本の社会にも氾濫はんらんしたマルキシズムの洪水の中に見た例で、私たちはそれをはつきり知ることが出来ます。パンの問題がただ一つの社会的なむしろ人生的な関心であった当時の若い人々にとつては、教養などという言葉は虫の喰くった古代語に過ぎない上に、寒暑を凌しのげば足りる着物に余計なひだ飾りをつけたり、儀容を張ろうとして芝居の衣裳めいた陣羽織や外套を着たりすると同じくらいに異様に贅沢で滑稽にさえ感じられたのです。そうして錦繡や宝石がブルジョアに専有された剰余価値を形象化したものであるように、教養もまた他の優雅な趣味と高い徳操とかと等しく、不当所得の掙とらえあげたものに外ならないと考えようとしたのでした。この気早い断定も若い一図いちずな憤激ほんげきの迸りとして十分同情的に見得た人々も、彼らの否定が教養から知識にまで喰い込みそうな形勢を示した時には厳し

く反対しないではいられませんでした。あなた方の高等学校からの友達が未練なく大学をやめたり、またやめさせられたりするのを見るたびに母さんもひそかに重い溜息をついた一人でした。逆巻く濁流に飛びこんで抜き手を切ろうとするには、泳ぐことに飽くまで熟練していることとともに、それを基礎づける強い体力と、より強い不撓ふたうな意志を必要とするのではないのでしょうか。単なる興奮や勝利感だけでは決してドーヴァーを乗り切ることは出来ないのですから。しかし高みの見物ということがこうした場合いかに良心的に苦しいものであるかは十分察しられます。またそれを思い悩まないほど主我的に若いころが押し歪められているとすればかえって怖ろしいことです。それにもかかわらず彼らの学業の抛棄に賛成することが出来なかつたのは、人がそのおかれた位置を各自に守ることはいろいろな意味で非常に大切だと信じていたからでした。

<sup>(2)</sup> これらの考え方はあまりに知識の偏重に陥つたものだと攻撃されそうな気がします。しかし現代の日本の高等学校ないし大学の教育で彼らが多すぎたことを怖れるほど豊富な知識が果たして与えられているでしょうか。豊富に見えながら単に雑多な、きれぎれの、基礎的なものから遊離した知的断片が押しこまれていないと誰が証明し得るでしょうか。あなたの専攻した古典語に例を取ってみても、原語で『イリアス』や『オデュッセイア』の読める人が果たして日本に幾人いるかと思われるくらいです。他の学問のことは多くをいう資格がないのですが、私は外国語を媒質として撰取されていた明治時代からの欧州文化の享受法について或る漠然とした疑惑をもっていた一人でした。一言にしていえば逆コースを駆っているような気がしてならなかつたのです。ヨーロッパの学者たちは彼らの種々な学問に対して源泉からいとも自然に流れにそって下るような便利な研究方法が取れるに反し、私たちはその末湍まつたんの渦のあいだで押し揉もまれたり、溺れかけたり、さんざ無駄をした後にどうかして上流に溯さかのぼってみなければならぬと心づく時には、もうその時間も体力も残されていない状態になっています。むしろその水流がどこに発してどう集まり、どう迂曲しているかを知ることなしにその流域について論じたり、水勢や水色の変化を考えたりにしている場合が多いのだと思います。それらは外国の文化の移植に際してその伝統の根元をなすものを全き繋つながりのまま輸入する代りに、急場の必要に応じて枝を折ったり、樹皮を剥いたり、葉だけ摘んで持ち込んだりした結果に外ならないのであり、私たちの日本に於ける明治初期のなんでも手っ取り早いことを第一条件とした享受の仕方は、その形態を特殊にしたと

もに弊害と不備をも内在させたことは否定されないと信じます。なにか魔法じみた迅速さで手際よく拵らえあげた仮屋にそれがいつとなしに生じさせた雨洩りは、教育者たちをして古来の淳風美俗に汚点を印するものとして嘆かせ、為政者らはまた政治的ならびに社会的機構のすべてに互つて建てつけが狂いだしたのを見つけてあわてています。結句人々は取り入れ方の如何を考えるまえに取り入れたものが間違っていた、もしくはこれ以上に取り入れる必要はないほど十分取り入れたとして今度はかえってそれを排除することに努めようとしているのです。これに対して私はまえに高等学校や大学に於ける知識の偏重の問題に触れた時に提出した疑問をここでも再び繰り返したいと思ひます。

はじめ私は教養を素朴に規定して知識が単に知識として遊離しないで人間と生活の中に総合的な調和ある形で結びつくことだ、といったと思ひますが、ここでもう少しくわしく直して、人々がよい教養をもつということはその専攻した知識を、もしくはさまざまな人生経験を基礎としてひろい世界についても周りの社会に対しても正しい認識をもつとともに、つねに新鮮で進歩的な文化意識に生きることだということまでその円周を押しひろげたく思ひます。またそうすることによつて教養が人間性の完成にいかにか深い意義をもつかを証明することが出来るのですから。働いても働いても食べられないというような人間をなくするばかりでなく、耕地で土塗みれになったり、工場で綿埃をあびたりしている男たちや女たちが、仕事着を脱いで一服吸いつける時にはどんな高い知識や文化についても語り合えるような教養人になつてこそはじめて立派な進歩した社会といえるのではないでしようか。

(野上弥生子「ローマへ旅立つ息子に」より)

問一 傍線部(1)について、類似点と相違点がわかるように作者の考えを述べよ。

問二 傍線部(2)で、知識の偏重だとして攻撃する考えとはどのようなものか、説明せよ。

問三 傍線部(3)について、どの点が「逆コース」であるのか、説明せよ。

問四 傍線部(4)をわかりやすく説明せよ。

問五 作者は「教養」とはどのようなものであるべきだというのか、簡潔にまとめよ。

二  
次の文を読んで、後の問に答えよ。(五〇点)

偉大な思想家の思想といふものは、自分の考へが進むに従つて異なつて現れて来る。そして新たに教へられるのである。例へば、古代のプラトンとか近代のヘーゲルとかいふ人々はさうと思ふ。私はヘーゲルをはじめて読んだのは二十頃であらう、併し今日でもヘーゲルは私の座右にあるのである。はじめてアリストテレスの『形而上学』を読んだのは、三十過ぎの時であつたかと思ふ。それはとても分からぬものであつた。然るに五十近くになつて、俄にアリストテレスが自分に生きて来た様に思はれ、アリストテレスから多大の影響を受けた。私は思ふ、書物を読むと云ふことは、自分の思想がそこまで行かねばならない。一脈通ずるに至れば、暗夜に火を打つが如く、一時に全体が明らかとなる。偉大な思想家の思想が自分のものとなる。私は屢若い人々に云ふのであるが、偉大な思想家の書を読むには、その人の骨といふ様なものを掴まねばならない。そして多少とも自分がそれを使用し得る様にならなければならない。偉大な思想家には必ず骨といふ様なものがある。大なる彫刻家に鑿の骨、大なる画家には筆の骨があると同様である。骨のない様な思想家の書は読むに足らない。顔真卿の書を学ぶと云つても、字を形を真似するのではない。

例へば、アリストテレスならアリストテレスに、物の見方考へ方といふものがある。そして彼自身の刀の使ひ方といふものがある。それを多少とも手に入れば、さう何処までも委しく読まなくとも、かういふ問題は彼からは斯くも考へるであらうといふ如きことが予想せられる様になると思ふ。私は大体さういふ様な所を見当にして居る。それで私は全集といふものを有つてゐない。カントやヘーゲルの全集といふものを有たない。無論私はそれで満足といふのでもなく、又決してさういふ方法を人に勧めもせない。さういふ読み方は真にその思想家の骨髓に達することができればよいが、然らざれば主観的な独断的な解釈に陥るを免れない。読書は何処までも言語のさきさきまでも正確に綿密でなければならぬ。それは云ふまでもなく万人の則るべき読書法に違ひない。それかと云つてあまりにさういふ方向にのみ走つて、徒らに字句によつて解釈し、その根柢に動いて居る生きものを掴まないといふのも、膚浅な読書法といはなければならぬ。精密な様で却つて粗笨といふこともで

きるであらう。

何人も云ふことであり、云ふまでもないことと思ふが、私は一時代を画した様な偉大な思想家、大きな思想の流れの淵源となつた様な人の書いたものを読むべきだと思ふ。かかる思想家の思想が纏まるれば、その流派といふ様なものは、恰も蔓をたぐる様に理解せられて行くのである。無論困難な思想家には多少の手引きといふものを要するが、単に概論的なものや末書的なものばかり多く読むのはよくないと思ふ。人は往々何々の本はむつかしいと云ふ。唯むつかしいのみで、無内容なものならば、読む必要もないが、自分の思想が及ばないのでむつかしいのなら、何処までもぶつかつて行くべきでないか。併し偉大な思想の淵源となつた人の書を読むと云つても、例へばプラトンさへ読めばそれでよいと云ふ如き考へには同意することはできない。<sup>(4)</sup> 唯一つの思想を知ると云ふことは、思想といふものを知らない<sup>(4)</sup>と云ふに同じい。特にさういふ思想がどういふ歴史的地盤に於て生じ、如何なる意義を有するかを知り置く必要があると思ふ。況して今日の如く、在来<sup>ま</sup>の思想が行き詰つたかに考へられ、我々が何か新たに踏み出さねばならぬと思ふ時代には尚更と思ふのである。如何に偉大な思想家でも、一派の考へが定まると云ふことは、色々の可能の中の一つに定まることである。それが行き詰つた時、それを越えることは、この方に進むことによつてでなく、元に還つて考へて見ることによらなければならぬ。如何にしてかういふ方向に來たかといふことを、而してさういふ意味に於ても、亦思想の淵源をなした人の書いたものを読むべきだと云ひ得る。多くの可能の中から或る一つの方向を定めた人の書物から、他にかういふ行き方もあつたと云ふことが示唆せられることもあるのであらう。

(西田幾多郎「読書」より)

問一 傍線部(1)について、「自分の思想がそこまで行く」とは、具体的にはどういうことを指すと考えられるか、わかりやすく述べよ。

問二 傍線部(2)で筆者は「全集を有つてゐない」と記しているが、それはなぜか、またそのことを筆者はどのように考えているか、わかりやすく述べよ。

問三 傍線部(3)について、なぜ筆者はこのような人の本を読むことを勧めるのか、わかりやすく述べよ。

問四 傍線部(4)について、なぜ「唯一つの思想を知る」ということが、「思想といふものを知らない」ということと同じなのか、わかりやすく述べよ。

問五 筆者はどのような読書法を勧めているか、簡潔に述べよ。

次の文は、横井也有の「伯母を悼む辞」(『鶉衣』)である。尾張藩の武士であつた作者は、藩主に従つて江戸に赴く前に、いとまごいのために伯母を訪れたが、江戸に着いた直後に彼女の訃報に接してこの文章を書いた。作者は、俳諧・俳文や書・画などにすぐれた多趣味の人として知られている。よく読んで後の問に答えよ。(五〇点)

こはそもはかなき世なりけり。過ぎしはわづかに二十日あまり、<sup>\*</sup>武蔵に旅立する御いとま申さむとて訪ひまゐらせしに、<sup>(イ)</sup>例のまめやかにもてなさせ給ひ、のどやかに御物語ありしが、おまへなる瓶に花ども多くささせ置き給ひしにつけて、過ぎし冬、桜の挿し木といふこと人にならひて庭にさせ侍りしに、<sup>(ロ)</sup>まことにあやまたずなんと啓し侍りつれば、嬉しきこと聞きつるもの哉、今年の冬かならずささせてむ、そのすべきやう教へてのたまはせしほどに、<sup>(ハ)</sup>かかる御別れあるべしとは思しかくべきや。なほ何くれと語りつづけさせ給ふついでに、このごろ思しよれることあり、下に賤し<sup>(ニ)</sup>の耕す男かきて、上つかたに雲雀の高く上りたるさま画きて、それに発句して得させよとありしに、いとこちたくこそ、すすろなる筆のいかたが、及びがたくや侍らん、今は旅のいそぎにしづ心なく侍れば、さるべき発句も頼には思ひよりがたくなむ、さるにても吾妻に下り侍りて、いかで念じて、まほならずとも画きととのへて奉りてむとうけがひまゐらせし、そのいとまもなく、今はた悔しき数とはなりぬ。我が母上をはじめ、女の御はらから九ところまでおはしつ。<sup>\*</sup>皆にげなからぬよすが定まらせ給ひながら、うちつづきて世を早うさり給ひ、今は二方ばかりぞ残りどどまり給へば、母上うせさせ給ひし後は、いとど御かたみとも見奉れば、<sup>(三)</sup>なほざりに過ぎこしほどもとりかへさまほしう、今は身のおほやけにいとまなきものから、いかでうとからず仕へ奉る折もがなと、行末遠く思ひてしを、かかるはかなき便り聞きける心の、いくたびもた夢かとぞたどられ侍る。彼ののたまはせし空の雲雀も、雲隠れ給ふべきはかなきさとしにやとさへ、のこるかたなく思ひつづくるままに、

なき魂<sup>(ナ)</sup>やたづねて雲になく雲雀

注(\*)

武蔵||ここでは江戸のこと。後に「吾妻」とあるのも同じ。

旅のいそぎ||旅行の準備。

九ところ||九人。

皆にげなからぬよすが定まらせ給ひ||それぞれ相応の縁におつきになって。

雲隠れ||死ぬことの婉曲表現。

問一 傍線部(イ)〜(ニ)を、それぞれ主語・目的語などの言葉を補いながら現代語訳せよ。

問二 波線部の「かかる御別れあるべしとは思しかくべきや」について、作者はこの時の伯母をどのように回想しているのか、わかりやすく説明せよ。

問三 伯母から画と発句を所望された作者は、どのように答えたか。その答えの内容を簡潔に記せ。

問四 文末の発句の意味を解説せよ。

問題は、このページで終わりである。